風の石の道

川端康成

角川書店

昭和34年7月15日初版發行
昭和34年11月10日8版發行

書名　風のある道
定價　壹百八拾圓

著作者　川端康成
發行者　角川源義

中光印刷株式會社
株式會社　鈴木製本所

發行所　株式會社　角川書店
東京都千代田區富士見町二ノ・
振替口座東京一九五二〇八一

目次

夢　七
電話　二
母に　一七
黄ばら　二〇
目　二六
雪　三三
花　三六
客間　四一
元日　四六
紫水晶　五〇
富士　五七
急死　六三
前の妻　六七
ひなまつり　七二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

黒いパンプス　七八
吉　日　八五
つのかくし　八九
雨になる　九四
女の夢魔　一〇三
第二の思春期　一〇五
旅のたより　一一〇
朝の電車　一一六
さとがえり　一一三
母の涙　一二七
喫茶店で　一三三
速　達　一三九
外出着　一四四
姉の代りに　一四九

小雨　一五三
庭つくり　一五九
派手な帶　一六六
白いパラソル　一七〇
バザアで　一七六
最惡の日　一八二
稻妻　一八八
日盛り　一九四
日まわり　二〇〇
夏の終り　二〇四
飛行場　二〇九
天の川　二一七
長い髪　二二三
誕生　二二八

風のある道

裝畫　堀文子
題字　町春草

夢

……耳たぶに近づく唇のあたたかさや、やわらかさよりも、その唇におされて、ほつれ毛が頬にふれる、かすかなそよぎに、宮子はおののいた。

「横から來ました。」と言う、男のささやきがおかしくて、ふふと忍び笑つた。

腕に抱かれてから、その部屋に、上の娘の惠子も中の娘の直子もいるのを、宮子は知つた。

「向う向いていますよ。」と、男が言つた。

「ほんとうですわ。」と、宮子は答えた。

よろこびでわれを失つて、恥じはなかつた。

——目覺ましのベルがとげとげしく鳴り出した。

宮子の手はうつつなく枕もとをさぐつた。夜光時計の小さいベルが、なかなか指先きにあたらなくて、時計は生きもののように、掌のなかで鳴りつづけた。

宮子は自分の心臓が胸のそとへ出てしまつて、ぴくぴく動悸しているのが見えるかのように、な

んともいやな苦しさだつた。

（あやしい夢だわ。）

人心地がつくと、手なれた名古屋帯をしめ、足袋のこはぜをかけて、臺所に立つた。

カアテンをあけても、外はまだ薄暗がりだつた。

昨日の夕方近く、今年初めての木枯が吹いた。今朝は霜もおりているのか、足もとから冷えが忍びあがつて來る。

しかし、朝の支度に動きまわる時間なのは、眞山の夢を見たという不安に、深くはつかまつていられなくて、宮子は助かる思いだつた。

眞山は宮子の娘たちの友人で、上の惠子の愛人でもある。去年の夏、輕井澤で知り合つてから、娘たちと行き來をつづけ、一週間に一度はこの家へも訪ねて來る。

今ではもう、こちらの家族それぞれの性格にしたがつて、好みの話題をえらべるほど、この家の人々の生活に食い入つてしまつている、青年だつた。

娘たちはもう年ごろだから、眞山のほかにも、宮子の家の客間を、喫茶店のつづきでもあるかのように、遊びに來る青年がいないではなかつた。しかし、惠子や次女の直子、また末娘の高校生の千加子までが、眞山を好いている。

眞山の人柄のせいだと、宮子もみとめていて、眞山が惠子と結婚してくれるなら幸いだと、ひそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かな願いはある。勿論それは娘のためであつて、眞山が自分とどうなどと考えたことは、みじんもない。誓つてないと言えるのに、明けがたのあんな夢は、宮子をおびやかした。

宮子は娘ばかり三人の子持ちだが、妻になるのも母になるのも早かつたから、惠子とは姉妹と見られたことがよくあつた。眞山の夢の後では、それもなにか自分のまちがいであつたかのように、思い出されたりする。

宮子の隣りに寢ている千加子は、目覺しの音にも、向うへ寢返りしただけだつたので、もう起こさなければと、宮子が思ううちに、千加子は校服のセエラアを着て、臺所へ來ていた。洗面をしたばかりの、寒そうなまぶたや頰だつた。

家族のうちで千加子だけが、朝はパンとコオヒである。宮子が辨當をつめているそばで、千加子がトオスタアのスイッチを入れたり、食器戸棚をのぞいてジャムの壺を出したりしている。

「千加ちやん、お母さん、妙な夢を見ちやつたわ。」

氣になる夢は、話してしまえば消える、ということがあるので、宮子はそう言つた。

「どんな夢？」

「どんなつて、夢だからめちやくちやで、話しようもないけれど、眞山さんの夢だつたわ。」

「そう。お母さんの夢のなかでは、眞山さん、もう惠子姉さんと結婚していた？」

「いいえ。」

「お母さん、眞山さんと惠子姉さんと、似ていると思わない……？」
「顔が？」
「そう。」
「似ているかしらん？」
「二重まぶたの線や、あごの形ね。前の世とやらの、兄妹じゃなかつたのかしら、そんな風に思う時があるわ。」
宮子はことりことりと庖丁を使いながら、似ているというよりも、似合いというような二人が、少女にそう感じさせるのだと思つた。この妹は姉をうらやんでいるのだろうか。
夫婦は長いあいだに、顔までどこか似て來たりするものだが、惠子と眞山はまだ結婚もしていない。
「前世の兄妹とは、千加ちゃんもいいことを知つてるわね。惠子姉さんにも、眞山さんにも、そう言つてあげなさいよ。」
「前の世の兄妹が、この世で、結婚するなんて、幸福だわ。」
「そうですかね。前の世で添えなかつた人が、この世でめぐりあうというのならいいけれど、前の世の兄妹じゃ、やつぱりいやだわね。」
「いいじやないの。」

姉ばかりで兄がいないから、千加子はこんなことを言うのかもしれない。千加子には父の愛も満ち足りてはいない。また、末つ子なので母にあまえ、今も母のそばに寝ている。

宮子と夫とは夜の別居が表面はおだやかに、もう三年餘りもつづいている。

「お母さん、どうかして？」

「いいえ、どうも。」

「髪、結つて。」

千加子は不器用で、まだ髪をまとめることが出來ない。斷髪もパアマネントも、校則で禁じられている。肩のあたりまでのびている毛を、二つにわけて、編んでおくのだつた。

さらさらした千加子の髪を、宮子は掌のなかに冷たく握つた。

電話

午前十時、茶の間も一度かたづいたところへ、惠子が花模様のスカアフを、タアバンのように卷いてあらわれた。

宮子は惠子を見ると、覺めぎわの夢を、また思い出した。

「直ちやんは……？」
「とつくによ。」
恵子は一つの部屋に寢ている、すぐ下の妹が出かけたのはわかつていながら、一應聞いてみる習わしだつた。
この竹島家の朝の食事は、三回になつている。高秋が特におそく一人の食事をする日は、それで四回になる。主婦の宮子はそれだけよけいに動かねばならなかつた。
恵子は九時まで起きて來ない。美容のために必要な朝寢だという。
恵子は高等學校の寫眞部にはいつていたが、その美しい容姿で、モデルにされることが多かつた。ある有名な寫眞家の指導による撮影會に、寫眞部の友だちと參加した時、寫眞家にみとめられて、モデルを頼まれた。それがきつかけで、雜誌のグラビヤなどにも出るようになつた。デザイナアにも使われはじめた。
それがつづいて、今では半ば職業のようである。しかし、恵子はモデルのクラブなどにははいらないで、素人（しろうと）という形をくずさなかつた。
高校生のころから、いくらかのモデル料を貯金していて、夏休みの小使いや、冬のスキイの支度にも、宮子を困らせないですんだ。
娘の美しいあいだは短いから、多くの人たちに美しいと見られて生きるのもいいだろうというの

が、父の高秋の意見である。惠子が男たちの目で、また女たちの目で、みがきあげられたような美しさになつて來るのも、高秋は危險としないようだつた。

また、三人の娘で、惠子が一番父に氣安くふるまつていた。高秋の方でも、宮子を呼ぶよりも、惠子に用をさせることが多かつた。

高秋が起き出したけはいで、宮子は惠子に茶盆を持たせた。

「はい、お茶。」と、惠子は父の前に坐つた。

「うむ。」

「今朝は冷えたわ。お父さん、湯たんぽ入れてらしたの？」

「いや。」

「お父さん、昨夜もおそかつたの？」

「うむ。」

「麻雀？」

「いや。」

高秋は朝刊をひろげている。

「お茶をあがらないと、さめてしまうわ。」

「うむ。」

惠子はもの足らなくても、こちらが一歩踏みこむと、父が澁面になるのを知つて、もうだまつている。宮子が運んで來た、長い漆の盆から、惠子は食器をならべて、父の前の小皿に、醬油を注いだりした。

三人そろつて、箸を取りあげた時、電話のベルが鳴つた。

「あたし。」と、惠子が母をおさえるようなしぐさを見せて、自分が立つて行つた。

惠子のやわらかい聲で、宮子はすぐに、眞山からだとわかつた。

「わたし、妙な夢を見ましたよ。」と、宮子は言つた。

惠子の電話のうちに、その話をして、夫に笑われでもすれば、氣がすみそうだつた。

「ふうん。」

「眞山さんの夢なんですよ。」

「ふうん。」

夫が取り合わないので、宮子は話しにくい夢を、自分のなかにしまいこんだ。

「惠子はなにを言つてるのかね。相手は女か、男か。長い電話だな。」

高秋も少し氣になるらしい。

夫婦の食事が終つても、惠子の電話はまだつづいていた。

その短い受け答えが、だんだん不服そうになつて、いら立つたりしている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com